HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第一部　通史.　第三編　北海道大学の再編（一九八九～二〇〇一年）.　第二章　入学試験制度
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 190-196
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28156
Type	bulletin (article)
File Information	3(2)_190.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学では統合メディアサービス基盤を利用して、講演会や学内行事の各部局大型ディスプレイ向け放送サービスや、インターネットに映像中継することが日常的に行われている。

第二章　入学試験制度

第一節　分離・分割方式と大学入試センター試験

一九八八年十一月の評議会で、北海道大学の入学試験を九〇年度から分離・分割方式で行うことが決定された。また、九〇年度から全国的に新しい共通試験である大学入試センター試験も実施されることになった。八九年度の入学試験関係の諸委員会・機関はその準備体制を整えた。

まず、一九八九年四月の第一回入学者選抜委員会では大学入試センター試験に向けて、「北海道大学主管共通第一次試験実施要項」を「北海道大学主管大学入試センター試験実施要項」へと名称変更し、札幌医科大学との共同実施体制を解消した。そして、新たに設置された「北海道地区連絡協議会」のメンバーとなることを決めた。

一九八九年五月の第二回入学者選抜委員会では、九〇年度入学試験の基本方針と行事日程を、前・後期日程の二回の試験に備えて整備した。大学入試センター試験は五教科六科目（数学二科目）とし、第二次試験については前期日程試験がほぼ従来通りであるのに対し、後期日程試験は小論文試験や面接を課すなど異なる選抜方法で行い、入学定員の一～二割を振り分けることとした。また、基本方針を公表する「学生募集要項大綱」は今後「入学者選

表３－２　1991年度募集人員　（1990年12月12日入学者選抜委員会資料）

系・課程	募集人員	募集人員の内訳			
		前期（予告倍率）		後期（予告倍率）	
文Ⅰ系	175	145	(4.0)	30	(6.0)
文Ⅱ系	280	250	(4.0)	30	(A)
文Ⅲ系	255	225	(4.0)	30	(10.0)
理Ⅰ系	725	610	(4.0)	115	(6.0)
理Ⅱ系	440	370	(4.0)	70	(6.0)
理Ⅲ系	208	175	(4.0)	33	(6.0)
水産系	219	184	(4.0)	35	(6.0)
医学進学課程	100	90	(5.0)	10	(B)
歯学進学課程	60	52	(6.0)	8	(10.0)
合計	2,462	2,101		361	

注　（A）は大学入試センター試験480/800以上10倍まで、（B）は大学入試センター試験630/900以上10倍までを表す。

抜要項（大綱）」と改め、第二次入学試験実施委員会で作成することとした。

一九八九年十二月に入り、入学定員の変更が急遽示達されたため、その増減定員を前・後期に振り分ける作業が行われた。経済学部（文Ⅱ系）定員二〇名増により文Ⅱ系は前期二四〇名、後期三〇名となり、医学部定員二〇名減により医学進学課程は前期九〇名、後期一〇名となった。

一九九〇年、初めての分離・分割方式による前・後期日程試験に対応するため、一月から三月まで合計五回の入学者選抜委員会が開かれ、受験者と合格者の判定が慎重に行われた。九〇年度合格者は前期日程二一四三名、後期日程三六二名を数えた。この間、法学部から出されていた文Ⅲ系入学試験科目の変更が正式に認められ、九二年度から前期日程試験は英語・数学・国語、後期日程試験は小論文のみとすることが三月に公表された。なお、九一年度は過渡的に前・後期日程試験とも小論文とされた。

一九九〇年四月から始まった九一年度入学試験の準備過程で最大の問題は入学定員改定に伴う配分の変更であった。文学部（文Ⅰ系）一〇名、経済学部（文Ⅱ系）一〇名、法学部（文Ⅲ系）二〇名、理学部数学科（理Ⅰ系）一〇名、工学部電気工学科（理Ⅰ系、理Ⅱ系）一〇名、計六〇名の増員計画に対し、前・後期日程試験による定員（募集人員）を表３－２のように定めたのである。

一九九一年二月末の入学者選抜委員会では、九三年以降の入学試験について、実施方式は分離・分割方式とするが、教科科目及び配点、定員配分と二段階選抜については当面、現状を大幅に変更しないことが確認された。九一年度合格者について分布を見ると、前期日程では道内高等学校卒業者が四七・二％、男子一七五四名(八〇・三％)女子四三〇名（一九・七％）、計二一八四名を数え、後期日程では道内高等学校卒業者が二四・七％、男子三〇六名（七八・五％）女子八四名（二一・五％）、計三九〇名となっている。

一九九二年度入学試験の準備は例年通り進められていたが、九一年秋に入りいくつかの新しい問題が生じ、十二月の第二次試験実施委員会において検討された。一つは九二年度定員六〇名の増加と農学部改組に伴う定員配分の変更である。新定員二五二二名を各系前・後期日程に振り分ける作業が行われた。第二は外国語（英語）の音声テストの実施で、入学者選抜制度調査委員会の答申を受けて二年の予告期間をおいて文Ⅰ系の前期試験への導入を準備することになった。第三は推薦入学実施について、既に行っている他大学の例も参考に北海道大学においても検討を進めることになった。

第二節　学部一貫教育体制と入学試験

一九九一年文部省による大学設置基準の大綱化がなされると、それを受けて北海道大学も教育体制の改編に向け大きく動き出した。九二年六月の評議会において、それまでの学内の議論「大学院整備構想検討委員会」「学部教育専門委員会」を踏まえ、「現在教養部で一括している一般教育の実施体制を学部を教育主体とする体制に転換すると共に、学生編成も学部別とする」決定がなされた。教養部を廃止して各学部が初年次から卒業まで一貫して教育を行う新体制が九五年から動き出すことになったのである。これは入学試験における定員配分も大幅な再編が必

要となることを意味する。そこで年末には入学者選抜制度調査委員会に諮問が行われた。答申は九三年二月二日に出され、それを踏まえて二月十日の入学者選抜委員会で以下の決定がなされている。第一に九五年度から系・課程別入学試験を廃止し、学部単位か学部内の系単位、具体的には文学部、教育学部、法学部、経済学部、医学部、歯学部、薬学部、獣医学部、水産学部の九学部と理学部四系、工学部四系、農学部三系の一一系とで募集を行うこと。第二に募集人員は前期日程二一一二名、後期日程四一〇名とすること。第三に大学入試センター試験、第二次試験の科目は一部を除き、現行通りとすること。第四に後期日程に現行の医学部、歯学部に加えて薬学部、獣医学部でも面接試験を導入すること、である。また、特別選抜方法として薬学部で一部定員につき推薦入学を実施することも承認された。そうして九五年度以降の入学試験の大綱を二月に定め、それを三月二日に公表した。

一九九四年度入学試験は従来通りの七系二課程で募集を行う最後の機会となった。九三年五月から例年通りの準備を進める傍ら、九五年以降の学部一貫教育の導入に伴う入試制度の改編に向けて、三月の「大綱」に続く、「細目」、さらには「入試の実施組織およびその運営」も検討した。そこでは総務部会の充実、特別選抜機関の独立など実効性の向上と責任体制の明確化が図られた。

一九九四年五月に入ると新たな学部・系別の募集方式で九五年度入学試験の基本方針を定めた。この入学者選抜委員会からは、新設の副学長もメンバーに加わっている。九五年度入学試験の最初は九四年暮れの薬学部推薦入試であった。十一月に受験者を一〇七名に絞り、十二月小論文と面接による試験を行い、同月の入学者選抜委員会で一六名の合格者を決定した。さらに、同入学者選抜委員会では、文・理・工の三学部での臨時増募廃止、および文・理・工・水産の四学部での学部学科改組に伴う定員の再配分が行われた。また、外国語（英語）の音声テストを九六年度から文系四学部の入学試験で実施すること、それに関する公表は九五年三月までに行うことも決まった。

一九九五年度入学試験では一月の兵庫県南部地震の影響で願書受付に若干の混乱が出たものの、前期日程試験に

ついては定員二〇六二名に対し六三三九名（三・〇七倍）、後期日程試験については定員四一〇名に対し五〇七五名（一二・三八倍）と例年並みの応募があった。

初の学部・系別入試を経験した後、翌年度に向けた一九九五年度最初の入学者選抜委員会では、九六年度入学試験の基本方針について、いくつかの学部で後期日程試験の方法を若干変更・改善した他は九五年度のものを踏襲した。ただし、募集人員については、教育学部の臨時増募廃止により一〇名が減じ、工学部が四学科から機械工学、応用物理学、原子工学の三学科に改組されたことから、定員配分が変わり、前期日程二〇五一名、後期日程四一一名となっている。

第三節　開かれた大学と入学試験

一九九〇年代後半から大学と社会の関わりが改めて注目される中、入学試験制度も社会のニーズの多様化に対応する形で、多種の制度が採用されるようになり、窓口が多様化した。同時に社会に開かれた大学を目指す方向から、入学試験についても閉鎖的な秘密性をできるだけ少なくし、公開度を高める努力がなされている。

「北海道大学入試説明会」は以前から開催され、試験問題のモニターなど、道内の高等学校との連携が比較的密にとられている。一九九三年には百年記念会館内に「大学入試センター進学情報サービス室」を設置し、大学入試センター試験に関する情報も入手し易くなった。九八年から全学的に実施された「体験入学」は、九九年に「オープンユニバーシティ」に発展し、大学・学部を広く高校生に開放し、受験希望者が自由に参加できる学部説明会や施設見学によって、大学を対受験生の面から社会に開かれた機構にしていく試みとなった。こうした新しい試みとともに、入学試験を取り巻く環境も公開度の高いものになっていく。二〇〇〇年からは国立大学協会の開示指針を

もとに、北海道大学独自の入学試験情報開示の努力がなされた。

一九九七年五月には、九八年度第二次入試基本方針において、一般選抜、帰国子女特別選抜、推薦入学特別選抜に、教育学部で新たに採用された高等専門学校卒業生選抜が加わり、入学試験方法の多様化が進んだ。十二月の入学者選抜委員会では、九八年度薬学部推薦入学合格者一六名を決定したほか、全学九〇名の臨時増募廃止に伴い、前期日程一九二五名、後期日程四三二名、計二三五七名の定員の配分を決めている。その他、出願資格の範囲拡大を巡って議論がなされた。九八年二月の第二次試験（前期日程）合格者からは、インターネットによる合格者発表が開始され、IT時代は大学の入学試験制度にまで及んだ。

一九九八年には臨時増募の最終廃止で三二名の定員減となり、前期日程一八九八名、後期日程四二七名、計二三二五名の新定員を学部別に配分した。この間進められた学内委員会の見直し整備をきっかけに、入学試験に関連する諸委員会や機関の規程等が全般的に見直され、入学者選抜委員会規程、大学入試センター試験実施要項、入学者選抜制度調査委員会要項、申し合わせ、実施部会要項が改めて整備された。推薦入学の採用も増え、二〇〇〇年度から理学部二系および歯学部で実施されることになった。また、受験生向けの大学案内として発行されていた「エルムの学園」も分かりやすく親しみやすいものへと大幅な見直しが始まった。

二〇〇〇年度入学試験に向けて、一九九九年五月の入学者選抜委員会では、化学科、地球科学科を新設した理学部、前・後期の比率を変更する歯学部および薬学部について募集人員の配分変更がなされ、二〇〇二年から工学部材料化学系と水産学部で推薦入学試験を実施することを決定し、二〇〇〇年度入学試験の基本方針を確定した。さらに、教育学部の高等専門学校卒業者選抜を後期日程から前期日程に移すことが既に決まっており、高等教育機能開発総合センターの工事により試験場の一部を学外に移すことも決定した。十二月の入学者選抜委員会では薬学部一五名のほか、理学部地球科学科五名、理学部化学科一〇名、歯学部一〇名の推薦入学試験合格者が認められた。

また、医学部の定員五名減に伴う募集人員の配分変更が決められた。

二〇〇〇年四月から、この間に慎重に準備を進めてきた「アドミッション・オフィス（AO）」入試体制が発足し、新たにアドミッションセンター長と入学者選抜企画研究部長とが入学者選抜委員会に加わることになった。従来、学部・系の責任で行われてきた推薦入学試験を深化・体系化し大学全体の制度とするとともに、高等学校等の学外の大学受験に対する関心も高めようとする試みである。二〇〇一年度入学試験から経済学部、理学部地球科学科、理学部化学科、歯学部、薬学部、水産学部でそれぞれ五～一六名の範囲でAO入試が実施される運びとなった。その結果、二〇〇一年度入学試験の基本方針は一般入学試験等従来の方式にAO入試を加えた六種類の入学者選抜試験が採用されることになったのである。十月から十一月に行われた初のAO入試では、経済学部九名、理学部地球科学科五名、理学部化学科九名、歯学部九名、薬学部一五名、水産学部一七名の合格者が決まった。

第三章　大学院改革

一九九〇年代の北海道大学における大学改革で最重要の課題とされたのは大学院改革である。

北海道大学の全学レベルにおける新たな大学院改革の胎動は一九八八年七月、全部局長等で構成する「大学院問題懇談会」の設置からはじまった。翌年五月には「北海道大学大学院整備構想検討委員会」が設置され、同委員会は九〇年七月に中間報告（事実上の最終報告）「北海道大学における大学院改革整備構想」を発表した。これが大学院改革具体化の出発点となった。大学院改革に傾注された努力の結果、その最も可視的な成果として実現したの